

第1回WG宿題事項

(都賀川水難事故における避難状況の整理)

新聞報道等によると、都賀川で急な増水による水難事故が発生した当日は、地域住民や河川利用者が、過去の経験や何らかの予兆をとらえて危険を察知し、“川へは近づかない”、“川から避難”、“まわりへの注意喚起”などの行動を起こしていた。

新聞報道による、都賀川の利用者や地域住民の避難行動を促した事象を以下に示す。

大雨洪水警報(声かけ)

- ・大雨洪水警報をラジオで知った[無職男性(59才)]

川で遊んでいた親子連れらに「帰りや」と声をかけた

黒い雲(声かけ)

- ・真っ黒い雲が低くたれこめ夕暮れのような暗さになり、増水の危険を感じた[消防団員(66才)]

近くで遊んでいる男児3人に川から上がるように注意した

過去の経験(降雨)(声かけ)

- ・普段から猛威を振るう都賀川を目にしてきた。「(雨が降ると)一気に増水し、津波のように押し寄せる。川底は渦巻くようになる」[建設会社社長(59才)]

橋の下で雨宿りする家族4人に「高いところに避難した方がいい」と声をかけた

濁った水

- ・茶色く濁った水が流れてきたのに気づいた[男性(69才)と(67才)]

約4mの護岸をよじ登って橋の下のすき間に避難した

上流の水かさ

- ・約200m上流で河川敷に水があふれているのが見えた[無職男性(69才)]

約60m上流の階段まで間に合わないと思い、護岸の上に這い上がって避難した

【参考】都賀川周辺での取り組みについて

「都賀川を守るう会」が昭和51年に結成され、「都賀川に清流を取り戻し、子ども達が水遊びの出来る美しい川を次代に引き継ぐ」をスローガンに、定例清掃、鮎の放流、魚つかみ取り、川開き・水遊び場開放などさまざまな活動が展開されてきた。

阪神大震災時に住民が都賀川の水を生活用水に利用したことから、緊急時の水源機能が認識された。

H8～17の都賀川の改修は、都賀川を守るう会をはじめ自治会や区役所との協働で整備された。都賀川は昔から水害で知られ、上流で大雨が降れば鉄砲水が来ると住民は注意してきたため、整備後についても、安全に川を利用していただくために、兵庫県、神戸市、都賀川を守るう会、自治会、区役所などが協働し、注意喚起看板設置、出前講座、パンフレットでの注意喚起、イベントでの啓発、防災教育教材の配布など、安全・マナーの啓発活動を実施している。



参考:「教えて!!都賀川」
(兵庫県パンフレット)

